# 親の期待に対する反応様式とアイデンティティ発達の関連

――期待への反発と迎合に着目して――

砂川　亜美

## 問題

アイデンティティとは，さまざまな同一化や自己像が，青年期に取捨選択されることによって成立する，斉一性・連続性を持った自我の確立状態である (Erikson, 1963)。アイデンティティ形成の検討においては，Marcia (1966) のアイデンティティ・ステイタス・モデルが広く用いられてきた。現在では，探求次元を広い探求 (EB) と深い探求 (ED)，コミットメント次元をコミットメント形成 (CM) とコミットメントとの同一化 (IC) というプロセスにそれぞれ分け，反芻的探求 (RE) の次元を追加した5次元モデル (Luyckx et al., 2008) などが広く用いられている。本モデルを基にした尺度であるDIDSの下位尺度得点によって，アイデンティティ・ステイタスの分類も可能となっている。

アイデンティティ形成は，自己と他者の間の視点の食い違いを相互調節によって解決するプロセスである (杉村，1998)。つまり，重要な他者の視点と，自己の視点のずれを調節する必要があり，親の期待などの重要他者からの視点はアイデンティティ形成に大きな影響を及ぼすと考えられる。青年ルターの事例 (Erikson, 1958) などからも，親の期待と自分らしさが適合していない個人は，アイデンティティの形成に困難を生じると考えられる。また，先行研究から，親の期待を認知している程度と探求次元には正の相関が，コミットメント次元には負の相関が認められた(Luyckx et al., 2007)。ただし，アイデンティティは個人の主体的取り組みにより形成されることから，本研究では親の期待の認知ではなく，期待に対する個人の反応様式について注目する。

池田 (2009) は，大学生からの自由回答を基に，親の期待に対する反応様式を数量的に測定可能な，8 つの因子を持つ尺度を開発した。特に，「親の期待への反発」や「親の期待への表面的な迎合」を示す個人は，親からの期待と自分らしさが適合しておらず (池田，2011)，アイデンティティ形成に関わる不安を感じていると推察される。

具体的に，反発と迎合は，以下のようにアイデンティティ発達の異なる様相を示すと推察できる。子は親の期待への反発を通して青年期以前に受容していた従来の規範を見直し，自分らしさを模索していく。反発する個人は今までに信じていた規範を問い直し，アイデンティティを形成しようとしている。一方，迎合する個人は，自分らしさとは一致しない規範に従属していることから，アイデンティティに関わる選択肢の模索といった営みは進行していないと考えられる。アイデンティティは主体的取り組みによって発達するが，親に迎合している個人は，主体性を失っている。そのため，アイデンティティ形成も進展せず，アイデンティティの危機に陥っていると推測できる。しかし，期待に対する反応様式を比較した研究は存在しない。

そこで，本研究では，5次元モデルに基づき，アイデンティティ・プロセス並びにアイデンティティ・ステイタスと親の期待に対する反応様式の関係について明らかにすることを目的とする。

仮説は，以下の通りである。まず，アイデンティティ・プロセスについて，反発は探求次元と正の関連がみられ，コミットメント次元とは負の関連があり，反芻的探求とは正の関連があると予測する。迎合は，探求次元ならびにコミットメント次元とは負の関連もしくは無相関，反芻的探求とは正の関連がみられると予測する。

次に，アイデンティティ・ステイタスについては，探索モラトリアムに属する個人が最も反発得点が高いと考えられる。拡散型拡散に属する個人は，迎合得点が最も高いと考えられる。

## 方法

**参加者**　広島大学の大学生 209 名のうち，データに欠損のある者を除き，有効回答は 171 名であった。このうち，親の期待を全く感じていないと回答した 41 名を除いた，130 名の回答を分析に用いた (男性 42 人，女性 88 人，$M$ = 20.82 歳，$SD$ = 1.87)。

**調査内容**

(a) アイデンティティ：Luyckx et al. (2008) によって開発され，中間他 (2015) が翻訳したDIDS-J (5件法，25項目) を使用した (CM，IC，EB，ED，REそれぞれについて，α = .87，.84，.85，.68，.75)。(b) 親の期待認知：池

田 (2009) にならい，親の期待を感じている程度を尋ねた (1項目，4件法)。(c) 親の期待への反応様式：池田 (2009) によって開発された，大学生における親の期待に対する反応様式を尋ねる尺度のうち，親の期待に対する反発 (9項目，α = .90) と親の期待への表面的な迎合 (4項目，α = .78) の項目を使用した。4件法。

## 結果

アイデンティティ・プロセスの 5 次元と，親の期待に対する反応様式の反発と迎合の関連を，共分散構造分析によって検討した (Figure 1)。なお，モデルの適合度は，$\chi^2$ (189) = 389.54, CFI = .90, RMSEA = .090, GFI = .80 であった。反発と迎合両得点において，反芻的探求との有意な正の関連が認められた。

DIDS-Jの下位尺度得点について，階層的クラスター分析 (Ward法，平方ユークリッド距離) を行った。なお，各クラスターの分類については，中間他 (2015) を参考にした。各クラスターの人数は，探索モラトリアムが37名 (28.5%)，早期完了が22名 (16.9%)，拡散型拡散が58名 (44.6%)，無問題化型拡散が13名 (10%) だった。

各ステイタスにおける親の期待への反応様式得点を，分散分析によって検討した。その結果，反発 ($F(3, 126) = 1.81, p = .15$)，迎合 ($F(3, 126) = 1.85$, $p = .14$) 両得点において，ステイタス間に有意差は認められなかった。

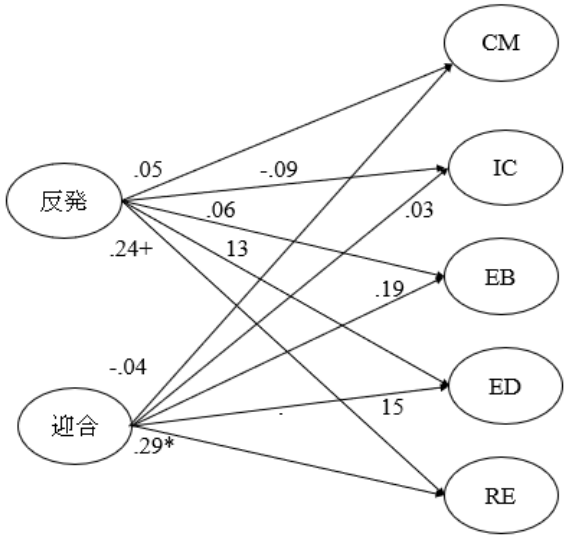


Figure 1. アイデンティティ・プロセスと親の期待に対する反発並びに親の期待への表面的迎合のSEM

注) 共分散と誤差項は省略し、性別を統制した。なお，図中の数字は，標準偏回帰係数を表示している。

## 考察

アイデンティティ・プロセスと親の期待に対する反発・迎合との関係について，仮説は部分的に支持された。5次元モデルでは，広い探求を行い重要な選択肢を探すことで，アイデンティティの形成が始まる。よって，広い探求との関連がみられなかったことが，他のコミットメント次元や探求次元とも関連が確認できなかったことと関係すると考えられる。また，反発・迎合得点と反芻的探求において正の関連が確認できた点から，親の期待と自分らしさが不適合であること自体が，アイデンティティ形成を阻害する要因であることが示唆された。

アイデンティティ・ステイタスと親の期待に対する反発・迎合との関係について，仮説は支持されなかった。ステイタス間に有意差が生じなかった理由として，アイデンティティ・ステイタスと親の期待を感じた経験との時間的解離が生じたと考えられる。池田 (2009) では，尺度作成の際，現在感じている親の期待のみならず，過去に親から期待を感じた経験を尋ね，尺度作成を行っている。さらに，渡部・新井 (2008) によれば，大学生が最も強く期待を感じたのは高校生活であった。よって，期待尺度に回答している際には高校生活について想起する一方で，DIDS-J に回答する際には現在の状況について想起するといった解離が生じ，アイデンティティ・ステイタスと期待に対する反応様式に有意な関連性が認められなかった可能性がある。

## 結論と今後の展望

本研究の結果から，自分らしさと親からの期待が適合していない個人は，アイデンティティの形成に不安などの不適応的経験を生じることが示唆された。今後は，親の期待と適合した個人に見られる反応様式と比較し，親の期待への反応様式とアイデンティティとの関連を明らかにする必要がある。補足的分析によると，先行研究 (中間他，2015) に比べ，拡散型拡散は有意に多く，達成，無問題化型拡散は有意に少ないことが確認された。よって，今回は，親の期待を感じた参加者のみを抽出して分析したが，親の期待を感じること自体がアイデンティティ形成に及ぼす影響について，今後検討する必要がある。

(指導教員：杉村　和美)